広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『鳩の翼』のミリー・シールとプラグマティズム
Author(s)	深町，悟
Citation	英語英文學研究 , 64 : 41 - 54
Issue Date	2020-03-30
DOI	
Self DOI	10.15027/49018
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049018
Right	著作権は，執筆者本人と広島大学英文学会に帰属するものとします。
Relation	

『鳩の翼』のミリー・シールとプラグマティズム

深町　悟

序

1902年に出版された *The Wings of the Dove* に登場する Milly Theale は著者である Henry James（1843-1916）の若くして病死した従姉妹の Minny Temple（1845-70）に着想を得た人物といわれる。彼が晩年に書いた自伝 *Notes of a Son and Brother*（1914）の中では，ミニー・テンプルを，“to lay the ghost by wrapping it, . . . in the beauty and dignity of art.”（515）と語り，彼女を美しく弔うことが『鳩の翼』の執筆意図の一つだったとしている。とはいえ，ニューヨーク版の序文にも書いてある通り，ミニー・テンプルをそのまま主人公としたわけではない。特にミリー・シールをニューヨークの旧家の生き残りとした点や，莫大な遺産の相続人であるなど，その属性については実在のミニーとかけ離れている。しかし，ミリーはミニーと同様に若くして亡くなる，という点は変わらない。それには，序文で“The process of life gives way fighting, and often may so shine out on the lost ground as in no other connexion.”（4）とジェイムズが語るように，敗れることの輝きを描くことが作品の魅力を増す仕掛けになるのかもしれないが，作者の創り上げたミリーが死に至る過程は甚だ過酷だといわざるを得ない。というのは，ミリーは利用し尽くされ死んでいった可哀想な人物と見ることができるからである。天涯孤独の若い女性が，死の病に罹り，愛する男や親友に騙され，生きる希望を失い死ぬのである。このようなプロットは，作者の従姉妹のミニーを美しく弔うどころか，彼女の死体に鞭打つようなものではないだろうか。もちろん，彼女を利用されるばかりの受動的な存在とは見ない研究は多くある。たとえば，自分を騙したはずのマートンに遺産を残したことについて，伝統的にはマートンや彼と共謀したケイトを許す行為との見解が提示されてきたが，ミリーによる復讐であるとの論調も台頭している。[1]

しかし，本論文では作品を貫くミリーの行動原理を論考することで，上述したものとは異なる見解を提示したい。その理由は，贖罪や復讐という視座からミリーを理解すると，彼女がミニー・テンプルをモデルにしたということとの間に不都

---

*本研究は JSPS 科研費19K13123の助成を受けたものです。

[1] 例えば，Merle Williams は *Henry James and the Philosophical Novel* でミリーの行いについて，マートンを自由にし，ケイトと幸せになることを願ったものだと論じるも（130），Dennis Flannery は *Henry James: A Certain Illusion* で，それを二人への計画的な復讐であると考え（181），Williams らの読みには反対している（230）。

合が生じるからである。たとえば，贖罪という点では，ニューヨーク版の序文でジェームズが語る主人公の人物設定“[S]he had been given from far back as contesting every inch of the road, as catching at every object the grasp of which might make for delay, as clutching these things to the last moment of her strength.”（5）から，可能な限り戦い続ける女性というミニー・テンプルをモデルにしたと思われる人物設定に反する。ひどい仕打ちを我慢し続け，マートンとケイトを最後に許すという解釈から見えてくるミリー像はあまりにも受動的なのである。復讐と捉えるならば，戦い続ける女性という設定には合致するものの，最後の第十部で彼女は死ぬまでマートンとケイトにやり込められ，ようやく死後に一撃を加えたことになる。それは，“[T]he last thing in the world it proposed to itself was to be the record predominantly of a collapse.”（4）とジェームズが絶対にしたくないものとして語ることに反し，ミリーはこの物語の大半において崩壊の連続だったということにもなるだろう。さらに，ミニーの死を「芸術の美と威厳に包む」とするジェームズの執筆意図は，ミリーが死後に復讐するという結末からどうやって達成されるかも疑問である。これらの理由から，彼女の死について別の見解を提示したいのである。その目的のために，特に用いたいのは，彼の兄であるウィリアムが広めたPragmatism的考え方である。これを採用するのには，ウィリアムの *Pragmatism*（1907）が『鳩の翼』の5年後に刊行されたとき，ジェイムズはウィリアム本人に手紙で“[I'm] lost in wonder of the extent to which all my life I have unconsciously pragmatised”（Phipps 9）と語り，彼はこれまでずっと無意識的なプラグマティストであったと告白するからだ。また，このことを否定する他の見解は見当たらないことから，本論文では，これが彼の本心であると仮定し，『鳩の翼』においても，何らかの形でプラグマティズムが織り込まれていると考えるのである。さらに，Gregory Phippsがジェイムズとプラグマティズムの関係を論じた著書 *Henry James and Literary Pragmatism* を2016年に出している。彼はこの本で，『鳩の翼』について，この哲学の生みの親であるCharles Peirce（1839–1914）のプラグマティズム論から議論している。[2] このような理由から，本論文においてミリーの分析にプラグマ

[2] パースとウィリアム・ジェームズのプラグマティズムには差異がある。そのため，ウィリアム・ジェームズが広めたことで大衆化されたプラグマティズムを厳密性に欠けるものとしてパースはプラグマティシズムというものを作り，自分の哲学が誤解されるのを避けようとした。パースとウィリアム・ジェイムズの両者の違いを大まかに言えば，特に真理の扱いに違いがある。パースのそれは厳密で普遍性のあるものを目指したのに対し，ウィリアムのそれは，個人的なものだと考えたのである。詳しくは，パースらによる『パース・ジェイムズ・デューイ』から「プラグマティズムの諸問題」の内［第七章，プラグマティズムとは何か］および，ウィリアム・ジェイムズ著『プラグマティズム』の「第六講，プラグマティズムの真理観」を参照されたし。

ティズム的考えを用いることはある程度正当化されると考えている。しかし，ジェイムズが「意図せずに使ってきた理論」と述べるように，彼の作品が正確にプラグマティズムを用いているとは考え難い。それゆえ，パースのような厳密な理論から論じた Phipps とは違ったアプローチで研究する余地はあると思われる。

本論文では，まず，ミリーが不都合な事実から目を反らすということに着目し彼女の考え方を論じ，その独特の真理観，また，遺産をマートンに贈った動機について論じ，さらには彼女の死がジェイムズにとっていかなる形でミニーの魂を弔うことになるのかを考察したい。

I. ミリーの行動は自己犠牲的であるか？

ミリー・シールとマートン・デンシャーが出会ったのは，彼がニューヨークに出張していた時である。彼はアメリカの若い女性たちについて記事を書くため，さまざまな人を取材していたが，ミリーはその中の一人だった。そして，ミリーはいつしかマートンに恋心を抱くようになった。そんな彼女にとっては，マートンの婚約者のケイトは恋敵である。しかし，ミリーとケイトは互いにマートンの話を一切しない。このことは読者に一種の緊張を与える仕掛けとも取れるが，それは正当な評価とはいえないだろう。なぜなら，ミリーもケイトも互いに信頼しているのであり，もっといえば，互いの評価に確信を抱いているからである。マートンの話題を持ち出すことは二人が互いに腹を探り合い疑念を抱く心理状態だったといえるだろう。また，ケイトがミリーに信じさせたと確信したこと，そして，ミリーが疑うべきではないと確信したことは，マートンがケイトに一方的な好意を抱いているということである。

しかし，そのミリーの確信にわずかにヒビが入る場面もある。それは，帰国したマートンとケイトがナショナル・ギャラリーで逢い引きしようとしていたところ，偶然ミリーが居合わせた時である。マートンを見つけて驚いたミリーは自分のすぐそばにケイトが立っていることでさらに驚く。このタイミングの悪さを取り繕う場面の一部は次のようである。“The handsome girl [Kate] was thus literally in control of the scene by the time Merton Densher was ready to exclaim . . . ‘Why Miss Theale: fancy!’ And ‘Why Miss Theale: what luck!’” (180) この引用から明らかなように，ケイトはマートンに取り繕うよう指示したとミリーは認識しているのである。さらに，ミリーは“It took, no doubt, a big dose of inspiration to treat . . . as not unpleasant— ”(180) と語られるほどに，このことは彼女の心を大変乱したのだ。つまり，ケイトとマートンがここに居たことが不快だった，という自分の気持ちには気付いているのである。これで二人が特別な関係であるという考えに至ることは簡単であるが，ミリーはあえて考え

を深めない。二人がこっそり会っていたことにあえて気付かないようにしたこの場面では，ケイトとマートンだけでなくミリーも同様に取り繕わなければならなかったのである。この件で自分はマートンには興味がない，という筋書きにヒビが入ってしまったのを修復しようとしたケイトは，マートンをミリーの前でぞんざいに扱う。そして，その姿を見たミリーはケイトに抱き始めた多くの疑念を自身の想像力で覆い隠すのである。[3]

このような例からも，ミリーは自己欺瞞によって自分に都合のよい事実を選び取っただけだともいえるだろう。しかし，この作品において，彼女のこのような考え方は特別とはいえない。むしろ，登場人物のほとんど皆が自分にとって有利な考えを信じ切って生きているとさえいえる。例えば，ケイトは自分を引き取ったモード夫人について次のように述べる。“ ‘The very essence of her . . . is that when she adopts a view, she . . . really brings the thing about, fairly terrorises with her view any other, any opposite view, and those . . . who represent that.’ ”（290）このように，モード夫人の考えの強引さが語られている。その強引さは，例え間違いがあっても，事実の方が自分の考えに合わせていくとまで信じるほどの大胆さでもある。また，Sir Luke Strett はミリーの病気について，具体的な治療の話をするのではなく，心配せずに何をしても良いと断言するのである。そして，生きられるかとのミリーの問いには“. . . isn’t to live exactly what I’m trying to persuade you to take the trouble to do?”（153），と語るように，生きることそのものを勧めているのである。つまり，生きられるかどうかはミリーの意思次第だという，自分にとって有利な確信を抱くように勧めるのだ。これらの例からは，ミリー以外の人物にも強い確信の力が備わっていることが描かれている。しかし，そのような固い意志を持った登場人物に囲まれながらもミリーの性格や考え方が特に読者の目を引くのは，ミリーがケイトの罠にかかっているのが明らかでありながら脱出しようとはしない異様さにあるのではないだろうか。死にかけているミリーがすがったのは偽物の救いでも，自分の希望を裏切る事実を彼女はあえて受け入れないことに決めるわけである。なぜであろうか。ウィリアムは『プラグマティズム』で，ある概念を受け入れることについて，次のように述べている。

---

[3] パースによれば，信念とは一定時間続く精神的な習慣のことで，疑念とは習慣の欠如であるという。また，真を手に入れるのに扱うことができるのは，疑いと確信だけであるとし，さらに真とは信念が無限に収斂して至った結果の絶対的な確信であるとしている（229）。しかし，信念が収斂していく過程には疑いによる検証が必要であるものの，ミリーの確信とは，信念を疑うことによって確信に近づくという道を経ていない。それどころか，疑いを検討せずに排除するという強い意志によって手に入れている。

> プラグマティックな原理に立つとき，われわれは生活に有用な帰結が流れ出てくる仮説ならば，いかなる仮説でも排除できない。・・・それがなんらかの有用性を持っているならば，それはその有用なだけの意味をもっているのである。そしてこの意味は，その有用性が人生の他の諸々の有用さとよく合致するとき，真となるであろう。(199)

ここでは仮説の持つ有用性が真となる過程を説明している。ミリーが排除しなかったマートンとケイトは相思相愛ではないということは，彼女の人生にとってあらゆる点で有益であっただろう。死の病に罹ったミリーにとってのマートンは正にあらゆる価値を持った彼女の人生そのものではなかっただろうか。ならば，マートンと恋ができるという仮説は「人生の他の諸々の有用さ」をミリーにもたらすもので，彼女にとって真となり得たと考えられるのである。また，病気を克服するという目的から生じる要請に唯一合致するものは，マートンを信じることの有用さでもあったわけである。しかし，この有用性が真になるということは，都合の悪いことから目を逸らし自分を騙しながら生きようとする自己欺瞞的な解釈で事足りるだろうか。そうすることでは解決できない場面がある。

II. 他者をも感化する自己欺瞞

ケイトにプロポーズをして断られたマーク卿はヴェニスの宮殿に住むミリーを訪問して彼女にもプロポーズをする。しかし今度はミリーからも断られるのだ。彼は再度ミリーに会いに行くが，これは求婚を断られた腹いせにケイトとマートンが婚約していることを告げ口するためだった。しかし，ミリーは逆に，その婚約が事実ではないことをマーク卿に納得させるのである。マートンはのちに，事の顛末をケイトから聞かされる。それは次のようである。“. . . after he [Lord Mark] had seen Milly, spoken to her and left her, Milly convinced him. . . . That you were [Merton was] sincere. That it was her you [Merton] loved.”（394）ここで語られるのは，マートンがミリーを愛しているならば，二人の婚約はあり得ない，というロジックである。詳細はこれ以上分からないものの，マーク卿も相応の確信があってミリーに告げ口したわけであるから，ミリーがそれ以上の確信を持ってこのことを伝えたのでなければ彼は納得しなかっただろう。結果的に彼は自分の読みが正しくないと考えたのである。

信念はあくまでも個人的なものであり，また，自己欺瞞の効果は自分自身に与えるものである。ならば，ミリーの他人をも感化する「自己欺瞞」には別の名が必要となろう。ミリーとマーク卿との対峙は，いわば互いの真理の戦いだったのかもしれない。とするならば，ミリーのものが優ったのは明白である。しかし，

ここでもプラグマティズム的な解釈が理解の助けとして利用できるだろう。ウィリアムは真理とは不活動で静的なものではないとし，次のような疑問を持つように説く。

> ひとつの観念ないし信念が真であると認めると，その真であることから我々の現実生活においていかなる具体的な差異が生じてくるであろうか？真理はいかに実現されるであろうか？信念が間違っている場合にえられる経験とどのような経験の異りが出てくるであろうか？つづめていえば，経験界の通貨にしてその真理の現金価値はどれだけなのか？（146）

経験界の通貨，つまり，現実世界における価値において，マーク卿の語る真理が何をもたらすかを考えれば，それは，マートンを愛すると決断したミリーにとっては無価値どころか有害であり，一方のマーク卿にとっても，ミリーから信じてもらえない以上, それは復讐を果たす能力を失った無価値な真理である。一方で，ミリーの真理の価値は，ミリーの生きる，また，存在する上であらゆる価値を有している。ならば，マーク卿の持つそれがまともに戦えるものではなかったということになろう。プラグマティズムの提唱者パースは，

> ある対象についての概念を明晰にとらえようとするならば，その対象が，どんな影響を，しかも実際的な意味をもつと考えられるような影響をおよぼすと考えられるか，ということをよく考察してみよ。そうすれば，こうした影響についての概念は，その対象についての概念と一致する。(232)

とプラグマティズムを定義した。これは，ウィリアムが説くところとも概ね一致している。[4] マーク卿の真理がどのような影響をミリーに及ぼしうるだろうかと考えるならば，それはありとあらゆる悪影響であろう。つまりは，マーク卿がもたらしたニュースそのものの概念は悪とみなせるということだ。それゆえ，ミリーにとっては一蹴すべき話だったのであり，彼女が信じないと決断するのに十分な理由があるだろう。マーク卿によってもたらされた悪性な効果は，マートンにとっても同じようなものだった。彼は告げ口をした後のマーク卿とすれ違ったとき，次のような感想を持つ。“The vice in the air was . . . too much like the

[4] ここで「おおむね」と言っているが，パースによれば根本的に大きな違いがある。パースは，影響についての概念とその対象の概念が一致すると述べるにとどめているのに対して，ウィリアム・ジェームズはある対象についての概念がその対象の実際的な影響によって確定されると考える（233）。

breath of fate. The weather had changed, the rain was ugly, the wind wicked, the sea impossible, because of Lord Mark.”（331）ただすれ違っただけで，彼はマーク卿のあたりに立ち込める悪の雰囲気をこれほどまでに感じるのだ。彼と悪を結びつけるのである。ミリーの運命を握っていると自他共に認めるマートンであるが，無意識的には彼女と運命を共にしているとまで感じていたのかもしれない。以上のことから，ミリーの他人をも納得させる「自己欺瞞」は，単なる自己欺瞞ではなく，他者の目から見ても有用で切実な選択をした結果，得られた信念であり，その有用性が優れているならば他の信念をも打ち砕くことができる確信の力ともいえるだろう。

III. ミリー・シールの価値

マーク卿と会った後のミリーの様子については，スーザンの表現を借りれば“She has turned her face to the wall”（334）とされ，この比喩からミリーが生きることを諦めた様子を言っているのだと解釈できる。そして，ミリーがマートンと再会するまでの数日間の彼女についてはよく分からないままである。マーク卿を納得させたミリーであるが，マートンから裏切られた事実は耐え難いほどに重かったはずである。生きる希望を持つことだけが彼女の生きる方法だったことは，医学的であるかどうかは別として，ルーク卿とミリー，また，他の登場人物たち，ひいては作者と読者の間でも了解事項ではなかっただろうか。そのように考えるならば，ミリーは生きる望みを失ったために死んだのである。換言すれば，ミリーは敗れたのである。ミリーはジェイムズの幼馴染であるミニー・テンプルをモデルとし，また，この物語にはそのミニーを弔う意図があったということから，ミリーが死ぬことは必定である。それでも，惨めに負けて死ぬというのは，彼女の弔いとしてはいささか不都合ではないだろうか。当然ながら，この死は単なる敗北とはみなせない。例えば，彼女の死の後にマートンとケイトが破局したことを踏まえて，Darshan Miani は“Milly dead being a more shuttering and moving force than Milly alive”（140），と死ぬことによってより影響力を持ったミリーについて言及しているなど，ミリーの死をある種の勝利とみなす見解もある。死ぬという定めに従い，死が成就した後で，より大きな存在となったのは福音書で語られるイエスにもなぞらえることができるだろう。また，ミリー自身が“Since I’ve lived all these years as if I were dead, I shall die, no doubt, as if I were alive . . .”（129）と語ることも，ミリーは死ぬことに生きる道を見出した登場人物だったともいえる。また，ケイトが確信を持って断言するのは“She died for you then that you might understand her.”（406）というミリーの死の理由である。ここで語られるミリーは死の影に怯える受動的な若い娘などではな

い。自分の死でさえ手段として使う，愛のために能動的に死にゆく女性なのである。

ミリーの肉体が死んだ後に残ったものは，彼女の莫大な遺産であるが，それに付随したのは彼女の遺書である。しかし，これは読む前にケイトによって燃やされ，マートンもそれに強く反対することはなかった。彼女の肉体は滅び，また，残された手紙でさえ消滅した訳で，それは，結果的に二人にとって，ミリーとの物理的な関係の解消ともいえる。しかし，彼らは遺書の内容に微塵の疑念も抱かない。そのことから，彼らにとって，目に見えるということと，目に見えて分かるということの間に寸分の違いもないことが分かる。プラグマティズム的に解釈すれば，等しい効果を与えるものは同一のもの，同一の現金価値と考えることができるのである。その後，二通目の手紙がニューヨークの弁護士事務所から送られてきたとき，ケイトはその金額を推定して次のように言う。“It's worthy of her. It's what she was herself . . . ”(406) ケイトのこの言葉は一読すれば，ミリー自身と彼女の遺産は同一のものであると，いくぶん守銭奴的な響きを感じさせるが，両者がどのような効果をケイトとマートンの二人にもたらすか，ということを念頭に考えれば，両者の一致は納得がいくのである。しかし，その金額がいくらであろうと，マートンがミリーとの思い出を愛するようになったことで，彼とケイトの関係は解消する。

IV. ミリー・シールの死の意義

ミリーが顔を壁に向けていた数日の間，彼女が何を考えていたのかは分からない。スーザンさえも知らない。ミリーがルーク卿に託けてマートンを呼び寄せた時，ミリーはマートンにヴェニスを発つように告げる。スーザンはマートンに婚約はしていないと嘘をつくように求めたが，マートンは結局ミリーに弁解しなかった。そのことについて後にケイトから説明を求められると彼は次のように言う。“ '. . . If I had denied you . . . I'd have stuck to it. . . . I wouldn't have made my denial, in such conditions, only to take it back afterwards.' ”(363) ここで彼は，重要な時についた嘘は実行する，ということを明言するのである。マートンの実直な性格が表われているこの言葉であるが，また一方，ウィリアムは真理について次のように述べている。「ひとつの観念の真理とはその観念に内属する動かぬ性質などではない。真理は観念に起こってくるのである。それは真となるのである。出来事によって真となされるのである」(147) この言葉を念頭に置くならば，マートンはまさにプラグマティズム的二者択一をした訳である。つまり，婚約状態であるという事実は，婚約しているという観念から真とされるものであり，それを否定するならば，違う観念が育ち，否定したことが真実化されていく

ということをジェームズは意識してマートンに発言させたのだとも考えられる。そして，ミリーに嘘をつくことはその別の真理化の過程に足を踏み入れることだったといえる。つまり，マートンはミリーと最後に会った時に以前から大事にしてきた真理を選び取った訳である。これは単純にマートンが嘘をつくかつかないか，という問題ではなかったのだ。

最後にマートンと会った時のミリーは婚約の話を一切持ち出さなかった。とはいえ，マートンが婚約について自ら弁明しなかったことには気づいていただろう。これは，彼女がマートンに配慮し，彼を追い詰めるようなことはしたくなかったからだとも考えられるし，彼の決意を読み取っていたからこそ，この話を持ち出さなかったとも考えられる。いずれの場合でも，ミリーがこの件でマートンを諦めたとは思い難い。というのは，諦めるならば，ナショナル・ギャラリーで二人に遭遇した時にそうしたはずである。彼女はケイトとマートンが特別な仲であることは承知でマートンに恋をしたのである。そんな彼女には，障害はあれどもマートンを愛するという姿勢に一貫性が見られるのである。これは彼女がマートンへの配慮を忘れることなく献身的に思いやる態度にも表れているだろう。死期が迫った彼女にとって肉体的な意味でマートンと男女の仲になることは叶わなかっただろうが，マートンが自分を愛するようになることまでをも諦める必要はなかった。もっといえば，彼との愛が真理化することを目指すことはできたのである。

ケイトと結婚するために大金を得る切実な必要性があるマートンは，ミリーの遺産を受け取ることで願いが叶うはずである。これはミリーも気づいているはずのケイトの計画である。一方で，遺産を受け取るということは，ミリー自身に相当するものを受け取るということでもある。このことでマートンが幸せになるならば，彼を幸せにするものが即ちミリーの愛，ということになるのだ。あるものが実際に与える効果とそのものの概念は一致する，というプラグマティズム的考え方を応用し補足すれば，マートンは幸せになる，という効果を彼女の遺産は与えるはずだから，その与える効果と，ミリー自身に相当するものの概念は同一であるといえるのだ。

さらに，この遺産は心底愛してくれる彼女自身を表すものであり，それを受け取り幸せになるということが，いかなる効果をマートンに及ぼすだろうか，ということを考えた時に，プラグマティズム的真理化の過程を考えずにはいられない。嘘をつけば，それを真実化しようとするマートンである。また，ケイトの計画に乗りミリーを愛する演技をしていたら，ミリーのことがケイトよりも魅力的に思えてきたという経緯も彼にはある。遺産を贈るというのはミリーからマートンへの純粋な愛情からなされたものである，と仮定するならば，それを受け取る

ということは，ミリーの愛を受け取るということでもあり，また，愛を受け取るということは，相手を愛するということでもある。このことが，今回だけは彼の中で真実化していかないとはどうしていえるだろうか。そして，彼は彼女の思い出を愛するようになったのである。マートンはお金としての遺産を受け取らなかった。その理由をケイトは次のように言う。“If you're in love with her without it, what indeed can you be more?”（406）ここでは，金額を知ることで彼がどれほどミリーを愛するようになるかとケイトは言っているのだが，結局のところ，マートンは遺産の金額を知るのを恐れていたのである。彼がどのような否定の言葉を言おうとも，彼はミリーを愛するようになった。別れることに彼が同意した結末からもそれは明らかである。

死後のミリーにとって最も幸福だったのはマートンがお金を受け取らずとも彼女を好きになったということだろう。マートンが受け取ったのは自分に遺産が贈られるようにミリーが準備してくれた，という事実のみである。この事実だけでも結局のところ彼はミリーの愛を受け取ったのである。ミリーを囲む登場人物たちにとっては彼女の実際的価値はその財産と同等であっただろうが，彼女は結局のところ，その財産を渡さずにマートンの心を手に入れたわけであるから，彼女は自分の魅力で惚れた男を振り向かせたといえるのである。

結

ウィリアム・ジェームズによるプラグマティズムを利用して，主にミリーの行動を論じてきた。彼の理論を使うことで見えてきたのは，死期が迫ったミリーの鬼気迫るといってよい程の一貫したマートンへの思いである。ミリーの行動原理は，ある確信に基づいたものだったといえよう。それは，マートンと相思相愛になれる，というものである。これはミリーが死の床につくまではミリー以外の人たちにとって偽であったが，ミリーにとっては常に真で，そして，結果的に彼女はこれを他者にとっても真へと変えることができたのである。ケイトが切実な必要性から企み，最愛の人を餌にまで使った皆が幸せになれるはずの計画は無為に終わった。彼女はミリーから望むものを手に入れることに成功したが，マートンというあるべきものを失ったのだ。自分を不幸にする様々な事実から目を背け，マートンを愛そうとした自己欺瞞的にもみえるミリーのさまざまな考え方や行動は自己完結的ではなく他者をも感化する。彼女の確信は何度も試練に直面するが，強い意志の力によって，それらに打ち勝つことができた。それゆえ，彼女の「自己欺瞞」は他者を感化するだけでなく，事実をひっくり返すほどの強い確信でもあるのだ。彼女は望む真理の真理化への道を歩み続け，たどり着いたのである。Phipps はパース的なプラグマティズムから信念の力についての考えを応用し，

ミリーが遺産をマートンに渡した理由をミリーが破壊的な疑いの力を避けようとしたためである，としている。さらに，パラドックス的ではあるが，これはマートンの愛を信じたと同時に，マートンの愛を疑ったためである，と結論づける(74)。しかし，ウィリアム・ジェームズ的な真理化について，また，概念の一致について考えるならば，ミリーは自分の愛が届くことを確信して遺産を贈ったと結論づけることができるのである。このように見るならば復讐や贖罪という考えから離れてミリーを理解することができるだろう。そうすることで，愛する男を求め，手に入れ，短い人生を生き抜いた一人の女性としてのミリーが見えてくるのである。そして，ミリー，あるいはミニーの死は美しく彩られるのである。

ミリーについて語られないことが多くあるゆえに，遺産を贈るという彼女の行為は，マートンやケイトは別として，読者にとっては不可解に思えることもあるだろう。しかし，無意識的にプラグマティズムを実行していたジェイムズにとっては，ミリーがマートンとの愛が真実化するほどに信じ抜き，その莫大な遺産を自身そのものとしてマートンに贈る筋書きは自然なものだったのかもしれない。また，このような疑念を持たないマートンやケイトもまさにジェームズのプラグマティズムに沿って行動する登場人物であると考えられる。彼らだけでなくこの作品の登場人物の多くが，プラグマティズム的ではあるが，本論では彼らの思考的特徴からその位置付けやミリーとの関係を考察するには至っていない。ただ彼女のそれは他を凌ぐ強い信念の力であることを論じるにとどめるのみである。この点についての考察はまた別の機会に行いたい。

同朋大学

引用文献

Flannery, Denis. *Henry James: A Certain Illusion*. New York: Routledge, 2016. Print.

James, Henry. *The Wings of the Dove: Authoritative Text, the Author and the Novel, Criticism*. Ed. J. Donald Crowley and Richard A. Hocks, 2nd ed. New York: Norton, 2003. Print.

---- *Notes of a Son and Brother*. London: McMillan, 1914. *The Internet Archive*. Web. 15 July. 2019.

Miani, Darshan Singh. *Henry James: The Indirect Vision*. Bombay: Tata McGraw-Hill Publishing, 1973. Print.

Phipps, Gregory. *Henry James and the Philosophy of Literary Pragmatism*. Oxford: U of Oxford P, 2016. Print.

Williams, Merle A. *Henry James and the Philosophical Novel: Being and Seeing*. Cambridge: U of Cambridge P, 1993. Print.

パース，チャールズほか『パース・ジェイムズ・デューイ』上山春平ほか訳，中央公論社，1980年。

ジェームズ，ウィリアム『プラグマティズム』桝田啓三郎訳，岩波書店，1974年。

Milly Theale and Pragmatism in *The Wings of the Dove*

Satoru Fukamachi

Milly Theale in *The Wings of the Dove* is said to have been based on the late relative of the author, Minny Temple. In James's autobiography, *Notes of a Son and Brother*, he writes about his inspiration for creating the novel; it was "to lay the ghost [Minny's ghost] by wrapping it, . . . in the beauty and dignity of art." (515). However, it seems that James was too harsh on the character in letting her die in a miserable way; being deceived by the man whom she sincerely loves, she nevertheless arranges to leave her fortune to him. This mysterious action has been controversial among critics and scholars. Traditionally, it has been thought to be an act of redemption. More recently, another view has attracted attention, namely that it is intended to be an act of revenge on Merton Densher and his fiancé, Kate Croy. This paper offers another view on Milly's mysterious bequest, namely that this novel is greatly influenced by Pragmatism.

Milly Theale is thought to be self-deceptive. This, indeed, can explain a lot about her. However, there are things that the theory of her self-deception cannot explain. For instance, when Lord Mark tells Milly that Merton and Kate are engaged, she not only refuses to believe it, but also is able to convince Lord Mark that he is wrong. Since self-deception should solely affect the person him/herself, Milly's belief needs a different name from self-deception.

Although Milly refuses to believe what Mark has told her, she suffers greatly, and eventually, Milly makes up her mind to let death come and devour her. Milly's attitude toward death is somewhat extraordinary—that she wants to die as if she were alive. This implies that she will not passively wait and waste time until death comes. Since Milly is seriously ill, she is unlikely to be able to be united with Merton physically, as a man and a woman. However, she still has a way to win his love; for her love is so sincere and strong that she has a chance to achieve what she truly wants.

At her last meeting with Merton, she does not even mention the slightest hint of what she heard from Lord Mark, and neither does Merton. Merton is supposed to deny Lord Mark's story, but he chooses to remain silent about it. Milly probably notices that he not only avoids the topic but also determines to

stick to the truth—that Lord Mark is right about it. If he denies something from the bottom of his heart he will make it happen anyway. So he has made up his mind to protect his engagement.

Since Merton and Kate really need a large amount of money to wed, they must have been craving for Milly's money. As Kate thinks the money represents Milly herself, receiving the money means accepting Milly in the Pragmatic sense. Supposing the bequest is made purely out of Milly's love, and Merton receives it, it means that Merton will accept her love, and he will also make his love for her true. By applying such Pragmatism, there is no need for Milly's bequest to be an act either of revenge or of redemption. It can be thought that because she sincerely loves Merton she just leaves him "what she was herself".

Doho University